

カフカ『城』におけるメシアニズム

植草あかね

1. はじめに

1922年に執筆を始めた未完の長編小説『城』は、カフカの死後、友人マックス・ブロートによって編集・出版され、現在までに三種類の全集が存在する。すなわち、ブロート版全集(Franz Kafka Gesammelte Werke: 1946年)、批判版全集(Kritische Kafka Ausgabe: 1983年)、そして写真版全集(Franz Kafka Ausgabe: 2018年)である。最後の写真版により、今日ではカフカの手稿にきわめて近い形で参照することが可能となった。手稿の複写とそれを「写実的転写 diplomatische Umschrift」と呼ばれる手法で活字表記化したものが対になって示されているため、削除や挿入の痕跡を追うことが可能となり、近年『城』の冒頭がどこに置かれるかが議論されるようになった。本論では、小説の始まりが「領主の部屋 Fürstenzimmer」とされることによって、カフカが『城』の執筆当初持っていたメシアニズムをめぐる構想が明白になるとして取り上げたい。

この箇所は批判版全集の段階で、別冊の参考資料として収録されていたにすぎないものだったが、写真版全集によって、ブロートがカフカの草稿を編纂し『城』というタイトルをつけ出版した際、切り離された「城ノート Schloss-Heft」の始まりを告げる断片であることが公に知られるようになった。この、別冊に「断片」として収録されたものには、村に現れた「客人Gast」と「女中 Stubenmädchen」エリザベートの会話が記され、エリザベートが客人に城について話してくださいと頼む箇所で途切れている。そして写真版ではその直後に、ブロート版と批判版の『城』の冒頭にある周知な文章、すなわち

K.が到着したのは晩遅くであった。村は深い雪の中に横たわっていた。城山は全く見えず、霧と闇が城山を取り巻いていて、大きな城を示すほんの微かな光さえも射していなかった。K.は長い間、国道から村へ通じる木造の橋の上に佇み、見せかけの空虚さを見上げていた¹。

と続く。

¹ Franz Kafka: *Das Schloss*, hrsg. von Roland Reuss und Peter Staengle, Stroemfeld/Roter Stern, Basel; Frankfurt am M., 2018, FKA I, S.11. [以下、同書からの引用は、略号FKAのあとに巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で示す。]

物語冒頭のこの描写は、主人公K.の眼前に城がそびえ立っていることを読み手に期待させながら、しかしそういった期待を絶えず裏切り、逃げ去っていく。例えば実際は、城山は「全く見えず」、K.は橋の上から空虚な場所を見上げていただけである、と結論できないだろうか。私たち読み手は城が現に存在するものとして物語に入っていくが、城の存在が怪しくなるだけではなく、さらに村と城との境界そのものもあやふやに脆く小説の中では描かれている。K.は橋から歩を進め、城山の麓の村にある宿屋に入る。そこで眠り込んでしまったK.は、城の執事の息子だと名乗るシュヴァルツァーに起こされる。そしてこの村は城の領地であり、ここに宿泊する者は伯爵からの滞在許可が必要であると告げられる。村にいるのだが、すでに「ある意味では城にいる」²と言われたK.は「どういう村に私は迷い込んだのですか？ いったいここは城なのですか？」³と困惑する。そんなK.をよそ目に「そうですとも」とシュヴァルツァーは当然のように答える。しかしながらK.は城主の伯爵に測量士として招かれているにもかかわらず、「城」と呼ばれる城山の建物には一向に入ることができないままであり続ける。例えば別の個所で城はこう描写されている。

城は、遠く離れたここから見える限りでは、K.の予期していたところにだいたい合っていた。古びた騎士の居城でもなく、真新しく飾り立てた建物でもなく、横にのびた構えで、少数の三階の建物と、ごちゃごちゃ立てこんだ低いたくさんの建物とからできていた。これが城だとわかっていなければ、小さな町だと思えたかもしれない。(中略)ところが、近づくにつれ、城は彼を失望させた。それは本当に惨めな小さな町にすぎず、村の家々が集ってつくられていて、ただおそらくどの家も石でつくられているということによってきわだって見えるだけだった。だが、家々の上塗りももうずっと昔にはげ落ち、石はぼろぼろと崩れ落ちそうに見えた⁴。

城は遠く離れた場所から見れば中心のある都市として存在している。しかし、近づいてみると都市に入ることはなく、結局は正体が田舎村の家々をただ寄せ集めただけの惨めな集落にすぎない。ここでは、城はいわば荒んだ村の家々の集まりとして、接近しては幻滅するためだけの存在として描かれている。踏破する目標としての城と、その周縁としての村の差異があやふやになる。そして

² FKA I, S.12.

³ Ebd.

⁴ FKA I, S.27f.

幻滅に至る。差違の消失による同一化は、カフカの『城』の地形図的な歪みである⁵。

この歪みは、カフカの友人として遺稿を編集し、『城』というタイトルの小説を刊行したブローツの「カフカ」解釈では汲みだせないだろう。シオニストの立場からのブローツの神学的解釈は一面的であるとして度々研究者から非難されてはいるが、とはいえブローツ版の広い受容は今日まで続くカフカ作品のイメージを決定づけてもいる。ブローツは『カフカ：その信仰と思想』において、カフカのあるひとつの「正しい」解釈としてこう書いている。小説の中のK.、つまりカフカの分身は、恐れと孤独感とのうちでさ迷っている、アフォリズムや日記のなかで語られる、あの「不壊なるものdas Unzerstörbare」⁶とのつながりを失った人間、つまり信仰において確信が持てなくなり、錯乱している人間を示しているのだ、と⁷。しかし、『城』においては、城は天上あるいは恩寵を表わし、その麓の村は人間の世界を表わしているというような比喩としての暗

⁵Vgl. Joseph Vogel: »am Schlossberg« in: »Schloss«-Topographien Lektüren zu Kafkas Romanfragment, hrsg. von Malte Kleinwort und Joseph Vogl, Transcript, 2013, S.23-32. [以下、同書からの引用は、略号JVのあとに頁数をアラビア数字で示す。]

⁶ カフカは1917年8月に喀血し、9月に結核の診断を受けた後、妹オットラが住む北西ボヘミアの寒村チューラウで長期静養生活を送る。そこで多くのアフォリズムを『チューラウ・ノート』に書き残している。その中から「不壊なるもの」についてのアフォリズムを二篇引用する。

「人間は自分の中の何か不壊なるものへの持続的な信頼なしには生きてゆくことができない。その際、その不壊なるものも、そして不壊なるものへの信頼も、彼には絶えず隠蔽されたままであることがありうる。この隠蔽状態の様々の可能な表現形態の一つが、人格神への信仰である。」(50)

「不壊なるものは一つである。個々の人間はそれであり、同時にそれは万人に共通である。それゆえ類例のないほど分かちがたい人間同士の結びつきである。」(70/71)

カフカによれば、最初のアフォリズムは、すべての人間は自分の中に「不壊なるもの」という神的な核心を持っているが、人間は自分の内部のこの核心を認識することなく、それを人格神という形で外部に投影してしまっている、という。つまり、諸宗教における人格神という観念は、この「不壊なるもの」の隠蔽状態であるというのである。カフカは神を、人間の外部にある超越的人格神から、人間の内部の神的本質である「不壊なるもの」へと移しかえていると考えられる。次のアフォリズムでは、人間は身体的に見れば個々に切り離なされているように見えるが、この「不壊なるもの」は各人に共通の存在基盤であり、人類の一体性は「不壊なるもの」によって根拠づけられているという。Franz Kafka: *Zürauer Zettel*, hrsg. von Roland Reuß, Peter Staengle, Stroemfeld/Roter Stern, Basel; Frankfurt am M., 2011.

⁷ Max Brod: *Über Franz Kafka*, Frankfurt am Main, Fischer Bücherei, 1966, S.223. マックス・ブローツ著、岡田幸一、川原栄峰共訳『カフカ』パンセ書院 1954年 15頁。

示を読み取ることはできない。なぜなら『城』はありきたりの比喩のように、感覚的に知覚できる現象と意味との間に明確な関係があるかのように読み取れないからである。むしろ、描写される様々な出来事の意味の連関は否定され、ついには現象そのものが曖昧かつ虚ろになり、それが実際に目に見えること自体疑わしくなっていく。いわば『城』の中では、意味構造が破壊され、そして現象そのものが霧散するかのような過程こそが読み手を困惑させるのだ。そして結局、意味の中心である、いわば「城」をとらえる試みとしての物語が中断する。その際、見聞きすることの試みが全くの無意味さに陥ったような感覚に襲われてしまうのだ。

ブロートはK.の臨終に、ついに城から村での滞在許可の知らせが届くという、神の恩寵の知らせが真理を探究する主人公K.の死に際して届く結末を想定して、『城』を出版したが、それは自身の解釈に都合のいいように、城を恩寵の座と見なしたにすぎない。このように小説の中で城は恩寵の比喩として、現存が確実であることが前提とされているからこそブロートはカフカの遺稿である小説のタイトルを「城」としたのである。しかしそれは、ブロートが自ら抱くシオニズムの希望、すなわちカフカが「何かが欠けている」と距離を取っていた世俗的メシアニズム⁸をいわば盲目に確信した結果、さながら橋の上に佇むK.の目にも映ったように、実際には存在しないかもしれない「城」が彼に見えてしまったにすぎないのではないだろうか。ブロートのいう、カフカの分身であるK.の眼に映ったものは、橋の上からでは輪郭だけがおぼろな、近づけば廃

⁸ ここでカフカが「何かが欠けている」と批判した世俗的メシアニズムに簡単に触れておく。世俗的メシアニズムの本質的要素とはユートピア的理想の実現、すなわちユダヤ人国家の再建である。ドレフュス事件(1894年)に衝撃を受けたテオドール・ヘルツル(1860-1904年)は、ユダヤ人の西欧への同化願望が空しい夢であることを思い知らされ、神やメシアという超越的力に頼ることなく、人間の力によってユダヤ人の民族国家を創ろうと試みた。この領土獲得運動を民族主義的な方向の世俗的メシアニズムと見なすことができる。マルティン・ブーバー(1878-1965年)はヘルツルの政治的シオニズムを批判したが、それはシオニズムが単なる領土獲得運動であってはならないと信じたからであり、ブーバーが目指したのは、ディアスポラの中で希薄になったユダヤ精神の復活であった。そしてそのユダヤ精神の復活によって、「人間精神の救済と世界の救済」が達成され、「メシア的な人類」が実現されるはずであった。したがって、ブーバーのシオニズムは、ヘルツルのシオニズムに比べると、より精神的・宗教的で、かつ普遍主義的要素も含んでいる。しかし、ユダヤ精神の復活はパレスチナにおけるユダヤ人国家の建設によって初めて可能になると考えている点においては、彼もまた明白に民族主義的であり、両者はメシアの時の到来を、いずれも超越的な力の歴史への介入に依拠することなく、人間的な力の延長線上に見ているので、本来のユダヤ教のメシアニズムを世俗化している点において相違はないと考えられる。中澤英雄著『カフカ ブーバー シオニズム』オンブックス2010年を参照。

墟の都市、いや鄙びた村でしかない城跡の連なりであり、間近に存在するのは差異が喪失する痕跡にすぎない。プロートには、このカフカの眼差しが共有できないのだ。先に引用した、小説の冒頭にある「見せかけの空虚さ」が、カフカの眼差しの空虚さを指すとすれば、以下に引用する遺稿の取り消し線のかかった断片も意義深いものとなる。カフカ全集の編集者マックス・プロート、そしてそれより新しい版の編集者であるマルコム・パスリーによっても、その断片は『城』本体とは関連がないとみなされたていた。

~~それでも依然として、その跡地からわかるように、伝承はそれがある広大な遠く離れた、城のような建物であったことを証明する⁹~~

ここでカフカは、城が「城のような建物」として遠い昔にあった伝承に支えられている遺物にすぎないと断言しようとしたが、それを避けて取り消している。中心を探すK.の目に見えた周縁は、遺物の痕跡に「すぎない」と断言する作家の視点を消し、K.の徒労と幻滅のみを書くことを、小説の戦略としてどうやらカフカは採用したらしいのだ。

それでは、この戦略の意図は、一体どこから由来するのだろうか。小説の中の城の存在が遠くにあって見えるのが困難でありながらも、しかし見えるように思えることや、中心（都市）と周縁（村）の差異・境界が不確かになり、K.の徒労した眼差しにおいて渾然一体となることは、カフカが自身の存在基盤を根拠づける伝承そのものの危機の中でK.と視点を共有し、自らの立ち位置を「測量vermessen」しようとした結果である、と解釈できないだろうか。つまり、『城』という作品の執筆それ自体が、カフカの「不壊なるもの」、すなわちメシアニズム探究の一プロセスだったのではないだろうか。

本論では、写真版『城』を用いて認識できるであろう、対話から一人語りが始まるという物語形式の枠構造が、そもそもメシアの到来という救済論としてのカフカ文学の意義を具現化していたのではないかと仮定し、考察を進めていく。そしてカフカが『城』の執筆当初、念頭に置いていたメシアニズムが明らかになるとともに、最終的にはメシアニズムの消失と、わずかに遺された痕跡を認めることになる。そういった新たな『城』解釈の可能性を本論では示したい。

2. 枠物語としての『城』

⁹ Franz Kafka: Nachgelassene Schriften II, Apparatband; hrsg von Malcolm Pasley Frankfurt am M., 1992, S.393. [以下、同書からの引用は、略号NSFIIApp.のあとに頁数をアラビア数字で示す。]

冒頭で述べたように、「領主の部屋 Fürstenzimmer」は批判版全集の段階で、別冊の参考資料として収録されていたが、写真版全集によって、プロートがカフカの草稿を編纂し出版した際、切り離された「城ノート Schloss-Heft」の始まりを告げる断片であることが明らかになった。プロートが切除した「断片」部分を本来の冒頭とすれば、『城』が客人の語る物語であるとして枠構造を採用していると解釈できる。もしカフカの手稿をさらに重視して、客人が実は枠構造内の『城』の主人公のK.とされると、プロートが望んだような異邦人のK.が城に受け入れられるという結末にはできないどころか、この客人は再び「村」を訪れたK.のことであり、しかも「城」にとっては危険な存在であるとも考えられよう。

「城」との和解を夢見るプロートのシオニズム的解釈¹⁰にとっては、枠構造の外のこの語り手は不要だったとも考えられる。『城』は枠物語構造で書かれ、K.を村に訪れたメシアと解釈できるというKleinwortの意見¹¹もあるのを踏まえて、「領主の部屋」と題された手稿の写真版を、実際ここで詳細に見てみよう。まず、村の宿に訪れた客人とエリザベートが二人きりで話を始める。

「エリザベート」と彼は言い、「私の話をしっかりと聞いてくれ。私には重大な使命があって、その使命に私の一生涯を捧げたんだ。私は喜んでそうするし、誰の同情も求めていない。もっとも私にはそれしかないのだから、この使命というのはつまり、私はその実行を妨害するだろうすべてのものを弾圧していく、容赦なく。エリザベート、私はこのような粗暴のせ

¹⁰ プロートによればカフカは次のような結末を考えていたとされる。長い間、安らぎもなく権利も与えられない村での生活の後で、K.は衰弱し、死の床にいる。しかしついに城からの決定的な知らせを携えた使者が訪れる。K.が村に住む権利はないにせよ、状況を考慮してここで生活し、働くことを許可してもよいと伝えられる。しかしその時、K.はすでに息絶えてしまう。プロートはこれをカフカの原初的な生活への憧れに基づく「共同体への参入」として自身のシオニズムと結びつけている。Vgl. Franz Kafka: *Das Schloss*, New York 1946, S.481f.

¹¹ Kleinwortはメシアを想起させる客人の描写について言及している。第一に、まるでその到着が預言の一部であるかのように、間近に迫った客人の到着について村人たちが話していること、第二に、客人は自身の「使命」に「全生涯を捧げる」とエリザベートに語っていること、第三に、エリザベートが客人の顔を(イエスが足を洗うのとは対照的であるが)洗うシーンがあること、第四に、エリザベートは新約聖書において、メシアの到来を知らせたヨハネの母の名前(ルカ福音書)であることが挙げられる。Vgl. Malte Kleinwort: »Das Schloss zwischen Buch und Handschrift« in: »Schloss«-Topographien Lektüren zu Kafkas Romanfragment, hrsg. von Malte Kleinwort und Joseph Vogl, Transcript, 2013, S.97f.

いで精神錯乱になりかねないんだ。」¹²

使命を果たすためにここにきた理由を客人はエリザベートに腹藏なく話し、そのうえで、なぜ私の到着を知っているのかという疑心を明かす。エリザベートはこう答える。

「村全体があなたの到着を知っていて、私はそれを説明できないけれど、もうすでに数週間前からみんな知っているわ。それはきっと城からで、それ以上はわからない。」「城から来た誰かがここで、私の到着をあらかじめ知らせたのかい?」「いいえ、誰もここには来ていないわ。城の人々は私たちとは付き合わないから、でも、ひょっとしたら城の召使いたちがそれについて話したのかもしれないし、それを村人たちが聞いたのかもしれないわ。そんなふうにしてひょっとしたら広まったのかもしれない。よその土地から滅多に人が来ないから、見知らぬ人についていろいろと噂話をするのよ。」「滅多に人が来ない?」と客人が聞くと、女中は「ええ」と言って微笑んだ—それは同時に人懐っこくも、よそよそしくも見え、「まるで世界が私たちを忘れ去ってしまったかのように誰もやって来ません。」¹³

このエリザベートのため息交じりの「ええ」という返事からは、メシアの到来を待ち望みながらも、同時にメシアの到来を諦めているかのようにも読み取れる。そのような見捨てられ、忘れられた村について訪れた客人の到着はメシアの再訪を想起させる。つまり、この場面では、客人が使命を帯びて村に到来したこと、またその使命ゆえに反逆者として、城から自身の存在が察知されるのを恐れていることがほのめかされているからである。客人は城の権力を「すでに」熟知していて、エリザベートは城から直接ではないが、客人の到来を「すでに」知っている。エリザベートは彼からゆっくりと手を離して、「あなたはまだ私を信用していないんですね」と言い、それに対して「当たり前だ」と客人は言って立ち上がる。「あなたたちは全員グルで、あなたは亭主よりももっと危険な人だ。あなたは、私の世話をするために、わざわざ城から送り込まれたんだ」¹⁴と取り乱し、ベッドに倒れこむ。エリザベートは急いで洗面台に水を取りに走る。そして彼のそばに膝をつき、彼の顔を洗う。そして「私に心を

¹² FKA I, S.7.

¹³ FKA I, S.8.

¹⁴ FKA I, S.11.

開いて話してください、私もあなたに心を開いて答えますから」¹⁵と言った後で、先に述べたあの冒頭、K.が橋の上で朦朧として城を仰ぎ見る光景が描かれることになる。つまり『城』とは枠構造の中の物語として開始されるはずのものであったのだ。

3. 枠物語の挫折と転回

K.が足を踏み入れる枠構造のいわば「内側」で描かれる城の麓の村は、村人が城の権威に順応しその場限りの噂を盲信している、伝承の語りが途絶えた、経験の積み重ならない世界である。K. (= 枠構造の〈外側〉)で登場する客人の男)がメシアであり、村人が救済されるという図式が、このような伝承が壊滅した忘却の場をカフカが物語として書くうちに、メシアによる救済の枠組みが変容を蒙ることになるように思える。K.が村での生活に入っていくにつれ、徐々にその底辺に至るまでの過程で、ついにはメシアによる救済という枠物語が放棄されるまでに至るようになる。それが決定的になるのは、枠内の物語の中にさらに枠が設けられ、村のある事件が語られる点にあるのではないかとここで考える。この過去の事件は、K.に手紙をもたらす城からの使者バルナバスの姉、オルガによって語られる。これから『城』の語りの転回点とも呼ぶべき物語枠の展開に至る過程を詳細に考察する。

K.は、婚約者フリーダの要請を振り切り、バルナバスの家と関わりを持つことになる。このことがフリーダとの決別をもたらすことになるが、しかもともとK.がこの貧しい家族に接近したのは、クラムに伝言を託した使者であるバルナバスに会うためにすぎなかった。というのもK.にはバルナバスはクラムからの手紙を自分に送り届けた、クラムに接近しうる手がかりを持っているはず人物と思えたからである。ところがバルナバスの家で彼を出迎えるのは、彼の妹アマーリアの方であり、ちょうどその時彼女は家の奥に座っている年老いた両親を介護していたところであった。アマーリアが近くでせわしく両親を介護する最中、バルナバスの仕事からの帰宅を待つ合間、家に居合わせた姉のオルガからK.は思いがけず、彼の知らない真実を聞かされることになる。

この、K.がアマーリアと対話する十五章の途中、K.の話し相手がアマーリアからオルガに変わるのが下の引用箇所、そこで実は、カフカは後から「章 Kapitel」と付け加えていた¹⁶。「領主の部屋」という枠構造の外側の物語では、客人は宿の亭主に頼んで女中と二人きりにしてもらい、城についての物語

¹⁵ Ebd.

¹⁶ FKAIII, S.182.

の展開の序章となるが、それが同様にここでも繰り返される。アマーリアが家事労働を中断し立ち去る、対話の交換の隙間に「長い間」が挿入される。すなわち、「アマーリアはまず両親のところへいき、何かささやいていたが、それから台所へ行ってしまった。彼女はK.に別れの挨拶もせず行ってしまったのだった。まるでK.がまだ長い間ここにいるだろうということを知っていて、別れの挨拶なんか不要だといわんばかりの態度だった」¹⁷、と記されている。K.とオルガが二人きりになりオルガが語り始めるまでの「長い間」、おそらくカフカ自身がこの「長い間」を、『城』の枠構造をもう一度組み直すための間隔として、語りを据え直そうとしたのではないだろうか。

オルガと二人きりで話す時間を得たK.とオルガは、暖炉の前の長椅子に腰を下ろす。その際にオルガとアマーリアの眼差しの対比がなされる。すなわち、「K.はオルガの青い、魅力的でも威圧的でもなく、内気そうに安らい、内気そうに耐えている眼を好んで見ていた」¹⁸のに対して、K.の説明では「アマーリアはあまりにも威圧的で、彼女の眼前で話される全てのものを、彼女は自分のものとしてしまうばかりでなく、彼女の相手になる人間は自分のほうから進んで全てのものを彼女にわけてやることになる」¹⁹とも描かれる。オルガはK.の妹に関する見解に同意し、「あなたが考えているよりも、もっと本当よ。アマーリアは私よりも若いし、バルナバスよりも若いけれど、家の中で事を決めるのはよかれ悪しかれあの人なんです」²⁰と家の実権が一番年下の妹に委ねられていることを明かす。また、さらに「彼女は私たちのことを気にかけてはいないけれど、私たちはまるで彼女が一番年上でもあるかのように彼女に頼りきっていて、彼女が私たちに、私たちの物事において忠告する時には、私たちはきっと彼女に従うでしょう。でも彼女はそのような忠告はしないし、私たちは彼女にとって他人なんです」²¹とも打ち明ける。つまりここでオルガは父が家長の威厳をとくに失い、しかも次世代の家長たるバルナバスもまた姉のオルガも飛び越えて、末の娘アマーリアに家庭内の実権が握られている奇妙さを言っている。家庭内の上下関係の崩れや歪みは他のカフカ作品においても見られるものだが、この場合は、オルガが一家の受難を後に語るための伏線がここです。

¹⁷ Ebd.

¹⁸ FKAIII, S.182-184.

¹⁹ FKAIII, S.184.

²⁰ Ebd.

²¹ Ebd.

に張られていると考えるべきであろう。

K.はオルガの話を聞いているうちに、この貧しい一家が城の権威に盲目に従っているわけでもないことに気づき、バルナバスが、今や一家の主である「アマリアの拒否する、おそらくは軽蔑さえしているような使者の務めをしていること」²²を疑問に思い、しかも一人前の「資格を持った靴職人」に専心せずに、なぜ城の使者という「副業」までするのかと尋ねる。彼に貧困から逃れる収入を稼げる術があるなら、使者の仕事は余計でないかとK.が言うと「『使者の仕事?』とオルガは驚き、『彼が収入を得るためにあの仕事を引き受けた、というのですか?』」²³、と激しく反応する。彼の使者の仕事をしている特別な事情を暗示するためにさらに伏線が張られるが、しかしそれだけで今回は済まない。オルガは、そもそも彼が仕える城の「文書仕事」の意義さえも疑っていることを打ち明け始めるのだ。家族の悲惨のきっかけとなった事件と、城の実態を主題にすることによって、物語における語りの主導権はオルガに移る。以下の引用で、フリーダの元に早く帰る約束をしていたK.の滞在時間を引き延ばすことに成功したかのような狡猾さえ引用では読み取れるだろう。

「でもあなたは、あの仕事はバルナバスを満足させていないと言いました」。「あの仕事は彼を満足させてませんし、それは様々な理由からなんです」とオルガは言い、「でもあれは城の仕事なんです。少なくともある種の城の仕事なんです。少なくともそう思えます」。「えっ?」とK.は言い、「それに関してもあなたたちは疑っているんですか?」。「ええ」とオルガは言った。「本当はそうじゃないんです。バルナバスは官房室へ行き、召使たちと仲間づき合いしていて、遠くから何人かの役人たちも見ていて、比較的重要な手紙を受け取り、口頭で伝える知らせも任せられますし、それはなかなかたいしたこと、そして彼がああ若さでどんなに多くのものに到達したか、私たちはそれを誇りにしてもいいはずなんです」。K.は頷いて、今はもう家へ帰ることは考えていなかった²⁴。

バルナバスにクラムとの関係を取り持ってほしいというK.の弱点を、オルガが弁えているから引き留めるのに成功しているのではない。むしろオルガ自身が、弟がしているのが本当に城の仕事なのかという疑念を持っていると聞き、

²² Ebd.

²³ FKAIll, S.184-189.

²⁴ FKAIll, S.189.

K.はさらに耳を傾けざるを得なかったのである。実際、K.は以前から城からの文書や仕事に関して同様の奇妙さを感じ、オルガの話聞くうちに、いつまでも城の本体に到達できない絶望的な遠さの実感がバルバナスの仕事の有り様を知りさらに強まるようになる。例えば、バルナバスは城の官房室へ行くが、たとえ官房室が城に属していたとしても、そこは全体の一部分にすぎず、その官房室が本当に城に属するかさえ怪しいと彼女は言う。彼女によれば、その官房室の奥に仕切りがあって、その仕切りの後ろにはさらに他の部屋があると想像される。バルナバスはその先へ行くこと自体は禁じられてはいないものの、その途中で彼が城の上役と出くわすと、バルバナスの用事がそれで済んでしまい、用なしはさっさとここから立ち去るように促され、彼はそれ以上先へ進むことはできないという。結局、オルガは城で重要な仕事を任されている弟を誇りに思いながらも、城の末端にすぎない彼が重大な任務に到達することが奇蹟としか説明つかないので疑念を抱くしかない。むしろそれは、奇蹟ではなく嘘、つまりクラムの偽物にバルナバスは振り回されているだけでないかとオルガはK.に語り始め、クラムは実体のない錯覚にすぎないという、城をめぐる認識の懐疑にまで彼女の話は至る。ところがオルガがそう言い出すとK.は咄嗟に話を遮り、「冗談を言おうなんてしないでください。クラムの外見についてどうして疑いが生じるのですか。だって、あの人がどんな外見をしているか、人々がよく知っているし、私自身もあの人を見ましたよ」、と反論する。²⁵

しかしオルガはクラムを村で目撃したというK.の主張は全く根拠がないという。というのもクラムはいつも淡い影のように曖昧であり、その外見は村人一人一人言うことが異なり、それはクラムが村と城とではほとんど根本的に姿が異なっているに違いないからだという。目撃者が置かれている瞬間的な気分、興奮の程度、希望あるいは絶望の無数の段階から、無限の違った外見が生じ、しかも大抵はほんの一瞬だけしかクラムを目にすることが許されていない以上、誰がそこにいる男がクラムであると言えようとオルガはK.の主張に反駁する。K.はオルガの説明を聞いて、彼女の疑心暗鬼にすぎないと思っていたものが、冷静な人間観察に基づく考察であるとやっと分かり、またその真摯さに触れさらに心が傾いていく。そしてオルガは、K.の手紙を配達することを通して、バルナバスが本当にクラムと接点を持っているかどうかは、どんなに疑わしいことであっても死活問題として避けられない定めだとK.に打ち明ける。K.はそう聞いて、オルガの語りを完全に信用するようにしてさらに身体をよせ合うが、それは村の中で完全に打ち解けて語れる場所をやっと見出したとして、以下のようにカフカは描写している。

²⁵ FKAIII, S.195.

(死活問題であるとは)「私にとってもです」とK.は言った。そして二人はストーブのそばの長椅子の上で前よりも身体をよせ合った。オルガからの不都合な新しい情報によって、K.は困惑したが、それでも一つだけ埋合せになる点を見つけ、その大部分は次の点にあった。少なくとも表面的に自分自身と、とても似たような目にあった人間をここに見出したということ、つまり彼が仲間入りできるような人間、フリーダとのあいだのようにただ大部分の点でというのではなくて、多くの点で理解し合えるような人間をここに見出したということであった²⁶。

4. 語り手の移行

K.はオルガの話を書くにつれて、バルナバスの使者の仕事の成果についての希望が次第に弱まっていくものの、かえって城と麓の村でのK.自身の状況を実感できるようになる。バルナバスの絶望的努力が、自分自身のそれと重なるように、いわば情熱として伝わってくるわけである。K.は村の物語を紡ぎだす語り手としてオルガを見出し、彼女の話をもとに耳を傾けるようになる。すなわち語りうる過去がこの一家の衰退にはあるのだと気づき、関心を持つようになる。ここで、小説において過去を語る主導権を誰が持つのか、語り手の視点がK.とオルガのあいだで揺れ動き、不安定になっていく。K.はオルガの過去の経験に、よりいっそう同化していきながらも、オルガの無邪気な性格に誘惑されてしまって、話の真偽について正しい判断を下せなくなってしまうようなことがあってはならないと、まだ完全に主導権をオルガに渡してはいない。だが、『城』の枠構造のなかに、さらに内枠が置かれ、それまで語り手であったK.が聞き手へと化していく土台が築かれてはいる。K.はオルガに対し、大人である他所で経験を積んだ自分ならともかく、まだ少年でしかないバルバナスを城のような場所に行かせる仕事を押しつけることの配慮のなさを責める。城の権威に大人なら対等に対処できると素朴に信じているK.はオルガの話をも突然遮る。

「ここであなたはとうとう決定的な点まで来たようです」とK.は言った。「つまりこうです。あなたが語った全てのことによると、今でははっきり私にもわかるように思います。バルナバスはこの任務のためには若すぎるんです。彼が語ることは何一つ、そのまま真面目に受け取ることはできません。上の城で彼は恐れあまり消え入りそうになるため、あそこで

²⁶ FKAIII, S.199-203.

は彼はよく観察することができないんです。それなのに城から下りてきて、ここで話すよう無理を言うと、混乱したおとぎ話を聞かされるということになってしまうんです。私はこれを不思議に思いません。」²⁷

またKは、バルバナスが冗談めかして「あの役人はまったくクラムにそっくりで、もし彼が彼の官房室で彼自身の机に腰をおろし、その部屋のドアに彼の名前が書かれているならば、私はもう疑いはしない」²⁸と言っているのを子どもじみた恐怖との戯れとも断じるが、オルガは反発して弟の子どもなりの分別を擁護する。Kは年長者のように分別くさく、「バルナバスのような、村から出たことがない経験の浅い若者を突然城へ送り、彼からありのままの知らせを要求しようしたり、彼の言葉の一つ一つを啓示の言葉のように受け取って調べたり、その言葉の解釈に自分自身の生活の幸福をゆだねたりしてはならない」²⁹と、年を重ねて経験を積んでいないと、城での権威主義的出来事を冷静に語れないものだとは主張する。このKの姿勢と発言を、カフカが書きながら皮肉に突き放し、弟の幼さゆえの恐れに共鳴するオルガに真実を語る権利を付与するのは当然である。すなわち、冷静で謙虚に事実には明瞭な判断を下せるのは、城に打ちのめされ、その権威の怖さが身に染みているオルガたちの側にしかないからである。そして語り内容の展開は時間軸に沿う成長ではなく、むしろどんな過去の経験も積み重ならないような、そんなカフカ世界において、Kの言う大人になる成長を描く教養小説の要素は何一つ見当たらない。そもそもカフカの場合、過去が伝承されることの不可能性を小説の語り手自らが体現しているものであり、ここでKに権力に抗するための助言者として語らせることがそもそも羞恥である。いわば、カフカはオルガを通して、さもプロートがシオニズムに傾倒し伝承の約束が果たされるのと同様の、Kの教訓のナイーブさに対し強烈な皮肉をぶつけているに他ならない。それゆえオルガの語りによってKの傲慢さがくつがえされ、語りの主導権が移行するのは必然なのだ。

5. 実体のない罪と罰

Kはオルガに対し自分がバルナバスに「あまりに期待をかけたものだから、彼に幻滅を味わわれることになった」³⁰と認めはするが、クラムの存在そのもの

²⁷ FKAIV, S.33.

²⁸ FKAIII, S.215.

²⁹ FKAIV, S.33.

³⁰ Ebd.

を疑うことはしない。オルガがクラムからの手紙の真偽を疑うのに対し反論して、「村長と彼の奥さんの証言によると、クラム自身によって署名されたもので、私的でほとんどはっきりしない意味ではあるけれど、ともかく大きな意味をもっているものなんです」³¹と断言もする。K.は城が発する手紙の権威まで放棄するわけにはいかない。それゆえK.は、バルナバスがクラムへ接近する許可を獲ているのにもかかわらず、城で何もせずに無駄に過ごしていることの違いとして、クラムの存在を疑っているだけでないか、またバルナバスは弱さかそれとも疲労のためか、自らの職に絶望し、任された手紙をK.に即座に配達しないだけだと非難する。さらにこの非難を、まだ若く未熟なバルナバスを一人きりで城へ行かせたオルガにも向けるが、これに対しオルガは、彼女の強制は一つもなく、むしろ反対さえしたのに彼自ら進んで行くことを決心したのだと述べる。そして、まだひ弱なバルナバスが家族を救おうと悲壮な覚悟をしてまで、なぜ城へ行くことになったのかという本当の理由、すなわちアマーリアをめぐる「あの決定的な日」についてオルガはついに語り始める。語りの舞台は冬の薄ら寒い現在から、父が壮健に努めていた消防隊組合の祭りの夏に遡る。アマーリアとオルガの姉妹が祭りのために着飾り出かけようという時の情景から、それは始まる。祭りの日、姉妹の美の優位をアマーリアが勝ち取り、また祭りが男性の衆目を浴びる婚姻の好機として白羽の矢が立てられる素朴な伝統の情景がまず描かれる。

「私たちは、アマーリアと私は、すでに何週間も前からその日を楽しみにしていました。晴れ着も一部分は新しくしておきました。特にアマーリアの服は華やかで、白いブラウスはレースの列をさらに重ねて、前が膨らんでいました。母がそのために全て自分のレースを貸してくれたんです。私はそのときそれが羨ましくて、お祭りの前夜は泣いて明かしました。翌朝に橋亭の女将が私たちを見にやってきた時にはじめてー」「橋亭の女将？」とK.が尋ねた。「そうです」とオルガは言った。「彼女は私たちととても親しかったんです。彼女がやって来て、妹のアマーリアの方が得をしていると認めないわけにはいかなかったので、私をなだめるためにボヘミアのガーネットでつくられた彼女の首飾りを貸してくれました。ところが、私たちが外出する支度を済ませた時、アマーリアが私の前に立ち、私たちがみんなアマーリアに感嘆して、父はこう言ったのです。『今日、私の言うことを覚えておきなさい、アマーリアは婿を手に入れる』。私はなぜそうしたのかわからないけれど、私は自分の誇りを、あの首飾りを外

³¹ FKAIV, S.39.

し、それをアマーリアの首にかけました。もう全く羨ましくなんかありませんでした。私は彼女の勝利の前に頭を下げました。そして、私は誰でも彼女の前では頭を下げるだろうと思ったのです。おそらく彼女が普段とは違って見えたことが、その当時、私たちを驚かしたんです。というのは、彼女は実際には美しくなかったのです。しかしそれ以来ずっと持っている、彼女のあの憂鬱な眼差しが、私たちをはるか高く超えていき、私たちはほとんど本当に、無意識的に、彼女の前で頭を下げないではいけないのでした³²。

「あの決定的な日」に、つまり三年前の七月の祭りの日には城からソルティーニという役人が来ていた。上の引用にある姉から妹に手渡されたガーネットがこの役人の欲望の標的となり、ソルティーニは祭りの翌朝に、使者をアマーリアに派遣した。手紙の宛先には「ガーネットの首飾りをつけた少女へ」としか書かれていなかったが、オルガによればそれは恋文と言うのにはほど遠い、むしろ内容を再現することすらはばかれる卑猥な手紙だったという。「決定的な日」に起きた事件とは要するに、祭りで乙女に一目惚れし、その日の晩のものにしようとした役人の拐かしと、それをアマーリアが手紙を破り拒絶したことだった。

この直後、村の実力者の家庭として尊敬されていた一家がいわば村八分にされる。その日を境にして家が没落の一途を辿り、三年前はまだいわば若者のようだった父はすっかり衰え、家業の靴屋の仕事も奪われ、また村の尊敬をも失い、家族は軽蔑されるようになったとオルガは語る。しかし、一家の迫害が決定的になったのは、アマーリアが手紙を撥ね付けた出来事により城の不興を恐れたのが原因でなく、本来は長女であるオルガが身につけるはずであったガーネットの首飾りをアマーリアに譲ってしまった掛け違いである。手紙には、ソルティーニが滞在する紳士荘へ来るようにという命令が記されていたが、その手紙の文面は読んだ誰もが、男がこんな破廉恥なことを書くなら相当墮落した女にちがいないと見なすような下品さだったとオルガは回想する。それならなおさらと、K.はオルガの話を通りかかろう反論する。ソルティーニが一通の手紙によってアマーリアを侮辱したにもかかわらず、なぜ彼が裁かれるのではなく、逆にアマーリアが裁かれているのか理解できない、と。つまり、「アマーリアには、名誉回復はたやすくできたはずですし、二、三日経てばその出来事も忘れられたでしょう。ソルティーニはアマーリアを危険にさらしたのではなく、自分自身を危険にさらしたんです。そこで、私が恐れを感じているのは、ソル

³² FKAIV, S.63f.

ティーニと、権力のこうした濫用がありうるという可能性とに対してなんです。この場合には失敗しましたが、それは事がはっきりといわれ、完全に見えすいていて、アマーリアという上手の相手にぶつかったため、何千もの他の場合、これよりも少し不利な場合には、こうしたことが完璧に成功して、どんな人の眼からも、悪用からも逃げるができるかもしれませんからね」³³とK.は見解を述べる。つまりK.は公に必要な手続きをしっかりと踏めば、正義は果たされ、アマーリアの名誉回復は上手くいき、救いがあると考えているのである。しかしこれに対してオルガはK.の婚約者フリーダを引き合いにして反論する。アマーリアの受けた仕打ちをフリーダも同様に受けた過去があり、フリーダはクラムの愛人になることを受け入れ、アマーリアは拒絶した。権力者の欲望を撥ねつけた報いとして、軽蔑され排除されるのは常に後者であるといった、この意味の深刻さをK.がまったく理解できていないとオルガはこう反論してくる。

「あなたは最も決定的なことがわからないんです」とオルガは言った。
「全てのことについてあなたの仰る通りかもしれない、でも、最も決定的なことは、アマーリアが紳士荘へ行かなかったことなんです。彼女がソルティーニの使者をどのように扱ったか、それはまだしも、そのことだけとしてはなんとかなったかもしれません。それはもみ消されたことでしょう。けれども、彼女が行かなかったということによって、呪いが私たちの一家にかけられてしまいました。そうなればもとより使者の扱い方も許しがたいこととなってしまう、そればかりか、世間の注目の的にされてしまったんです」「なんだって!」とK.は叫んだが、（筆者註：アマーリアが部屋に戻っていたので）オルガが頼むように両手を上げたので、すぐ声を落とした。「姉であるあなたが、アマーリアはソルティーニに従って、紳士荘へ急いで行くべきだった、なんて言わないですよね?」「いいえ」とオルガは言い「そんな嫌疑はかけてもらいたくありません。あなたはどうしてそんなことを信じれるんでしょう?アマーリアのように、やること全てまったく正しいような人を私は一人も知りません。彼女が紳士荘へ行っただとしても、私はもちろん彼女が正しかったのだと認めたでしょう。でも行かなかったことは、英雄的な行為だったんです。私ならば、あなたに正直に言うけれど、こんな手紙をもらったら、紳士荘に行ったことでしょう。私はそれから起こることに対する恐れに我慢できなかったはずで

³³ FKAIV, S.81,

す。そんなことができたのはアマーリアだけです。」³⁴

オルガはアマーリアの行為を英雄的であったと認め、そんなことは自分にはできないと、それを評価しながらも、実は英雄的行為の振る舞いが一家を襲った災難の原因だとみなしている。振る舞いですむなら、女性が役人からの誘いを断るのに直接的な表現を避けることくらいできたでしょうとオルガは言う³⁵。しかしアマーリアはそんなことも、それと似たようなこともしなかった。つまり、彼女はなんとか表面だけでも従う振りさえできず、それで一家もろとも不運に引きずり込むことになったわけである。K.はそれに対して、アマーリアへの不正な裁きなら、例えば村にいる弁護士を雇うなどして挽回することができるかとまだ信じている。K.は「ソルティーニの犯罪とっていい行為のためにアマーリアを告訴して、あるいは罰しまでもするなんてできるはずがないじゃありませんか？」³⁶とアマーリアの受ける罰がさも当然の成りゆきであるかのように語るオルガに疑問を発する。オルガはアマーリアに罰を加えることは「むろん法に従った訴訟によってではないし、またアマーリアは直接罰せられたわけでもありませんが、別な方法で彼女も私たち一家全体も罰せられた」³⁷と言う。続けてK.にさえも同意を得るよう説得する調子で「その場合にフリーダを引き合いに出すこともお許し下さい。でも、フリーダとクラムとのあいだには—最後にどうなったかということを除けば—アマーリアとソルティーニとまったく似たようなことが起こった」³⁸と述べる。それにもかかわらず、フリーダがいわば賢く切り抜けたことをこう説明する。つまり、「私がこの二人の場合を比較するといっても、その二つの場合が同じだとは言いません。それは互いに白と黒のような関係で、白がフリーダなんです。最悪の場合でも、フリーダについて人は笑うことができるだけなんです。(中略)でもこの場合笑う者でさえ、すでに悪意をもっているか、嫉妬しているかなんです。いずれにしろ人は笑うことができます」³⁹。アマーリアが拒絶したことをフリーダは受け入れた。その拒絶と承諾の選択を分岐に、二人はほとんど似たような出来事を

³⁴ FKAIV, S.81-85.

³⁵ FKAIV, S.85.

³⁶ Ebd.

³⁷ Ebd.

³⁸ Ebd.

³⁹ FKAIV, S.89.

共有している白と黒の関係にすぎないとオルガは説明する。だが過去の物語において、彼女は城を公的な法と同一視しているはずもない。役人の命令に従わなかった正しいアマーリアが有罪判決を下され、反対に役人の命令に従ったフリーダにはなんの罪もないとオルガが嘆くのではないのだ。しかもアマーリアは法にも城にも直接裁かれてはいない。一家が城に赦しを乞うても、そもそもソルティーニを侮辱した罪が存在せず、存在しない罪を赦すことは不可能だとかえって突き返されてしまうのだ。K.の言うように法に従って裁判を重ねれば、ソルティーニは相応の罰を受け、アマーリアの無罪が証明されるはずもなければ、そもそもこのアマーリアの罰を与える判決に実体がないことが、オルガによって明らかにされる事実にはならないのだ。

6. 「城」へのアンビヴァレントな感情

ではこの判決はいったいどこに由来するのだろうか。『城』のなかで描かれるのは、K.はなんとしてでも城に接近しようとし、村人たちに城について徒に尋ね回る。その結果、せいぜい村人が抱く城への畏敬の念だけを認識できるだけである。しかし、語り手のオルガによって明かされるそれ以上の内実は、村人が城に対して畏敬だけでなく憎悪も、二つの相違する感情を併せ持っていることなのだ。アマーリアをめぐる事件で露見するのは、要するに村人の城に抱く無意識的で両義的な感情なのである。この両義性において城への畏敬の念を上手く利用すればフリーダのような存在に、そうできなければアマーリアのように城への憎しみが一家に襲いかかる事実こそがオルガの物語る過去から導き出せる教訓である。このことによって城と村とがこの両義的無意識において癒着しているのが判明し、K.もオルガの語りによって徐々に村の滞在中に遭遇する不条理も省みて自らの経験を理解するようになる。例えば、冒頭の方に立ち返れば、K.が村に到着した夜、シュヴァルツァーは彼に城からの滞在許可証を提示するよう命令し、こう言う。「この村は城の領地です。ここに住んだり泊ったりする者は、いわば城に住んだり泊ったりすることを意味するんです」⁴⁰、と。そしてまた、K.自身も訪問当初持った「城」の印象を「惨めな小さな町にすぎず、田舎家が集ってつくられていた。(中略)家々の上塗りもずっと前に剥げ落ち、石はぼろぼろと崩れ落ちそうに見えた」⁴¹と描写するが、それは城やクラムが権力として実在しているのか、むしろ、その正体は廃墟に巣くう亡霊にすぎないとか判断できる以前に、「城」がいわば田舎の村人たちの無意識から産み出される幻想の力の脅威を小説の冒頭から予感していたからでは

⁴⁰ FKAI, S.12.

⁴¹ FKAI, S.28.

ないか。K.は村をさ迷い歩くが、決して城に至る道は出現しない。これはすでにある意味で村人の無意識という「城の中」にK.が囚われていることを暗示している。そして後になってオルガもやはり「城」についてこうはっきりと述べることによって、K.が当初から抱いていた予感を確証することになる。つまり、彼女は「私たちはみんな城に属しているので、距たりなんかないし、何も橋渡しなんかすることはない、と言われていました。それはおそらく普通の場合にはあてはまる」⁴²が、しかしいったん城との間に軋轢が生じるとなれば、城と村の一体から異物として放り出されるということから、一体感など「全くそれはあてはまらないということを見る機会を私たちはこれまでずっともってきました」⁴³、と述べる。オルガがK.に打ち明けるのは、家族の迫害された三年で身に染みて知った真実に他ならないとされるのである。

城と村の境界があるようでなく、しかも一体でありながらも城は疎外されていて村人の両義的な感情の投影となる。この両義性の投影を二人の女性の対比によって明らかにするのがオルガの語りである。例えば被写体の明暗が反転したネガフィルムのように黒と認識され失敗した例がアマリアの「正義」であり、村人の城への畏敬を背景に村人に白と認められ成功したのがフリーダということになる。要約してまとめれば、すなわちアマリアへの判決は村人の無意識の両義的な感情から由来したということになる。ここで、冒頭でプロットに取り除かれた「領主の部屋」に話を戻そう。この『城』の外枠において客人が村に来た理由は城との対決と明かされていたのが、オルガの語りによってこの構想は破綻したことにならないか、とカフカの絶筆の原因を想定してみたい。城の不条理な権威に対して村人と団結し、戦いを挑む救済者・メシアという当初カフカが用意した枠構造は放棄されるが、それもオルガの語りによって、それがK.の思い違いであると暴かれてしまったからであると言えないだろうか。城の権威は村人の無意識から由来し、そこから疎外された像となり村人に支えられている。自分自身の他者である憎悪が、いつまでも村人と城との隔たり生むのだが、それがK.、そして不運の一家を排除し、際限なく翻弄し続ける。

7. 終わりに

それならば救済はどこにあるというのか。おそらくK.の思っていたようには、救済はない。K.はオルガがフリーダを絶えず攻撃しようとし、K.にフリー

⁴² FKAIV, S.93.

⁴³ Ebd.

ダについて疑いを抱かせようとしていることを不審に思う。K.は、フリーダとの将来において救済があることをオルガに認めさせようとする。

「私は自分自身の意志でここへやってきて、自分自身の意志でここにどまっているんですが、これまで起ったすべてのこと、そして何よりも私の将来の見込みというもの—その見込みはどんなに暗かろうと、ともかくちゃんとあるわけなんです—、そういう全てを私はフリーダに負っているのです、これを議論から退けるわけにはいきません。私はここで測量技師として採用されましたが、それはただの見せ掛けだけで、人びとは私を翻弄し、どの家からも私を追い出しました。今日も私は翻弄されているのです。でも、もっとやっかいなことは、私はいわば、かさを増して大きくなったようなもので、それだけでも相当なものです。私はこれら全てがどんなにつまらぬものであるとしても、すでに家も地位も本当の仕事も、婚約者ももっていて、この婚約者が、もし私に他の仕事があるときは私の職務上の仕事をかわりに引き受けてくれます。私は彼女と結婚し、村の一員になるでしょう。クラムに対して公的な関係のほかに、もちろん今のところは利用できないでいるけれど、一種の私的な関係ももっています。これはきつとつまらぬものじゃないでしょう？」⁴⁴

カフカはK.に上記のようなセリフを言わせてはいるが、この後でK.はバルナバス一家に接触したことがフリーダに知られ、またフリーダは愛想が尽きたか、助手の元に走り、結果クラムとの繋がりを保証する縁を失ってしまう。「フリーダと結婚し、村の一員になる」といったK.の幻想が結局打ち砕かれる定めであるのは、オルガの語る過去の方がフリーダの評価も含めて、物語の真実として採用されているので、物語の展開としては自然である。K.の夢い定住の願望は、オルガの語る苛酷な一家の運命と比較するとなんとも幼稚に思えるが、この動機のナイーブさは『城』を編纂したブロートがカフカから聞いたとされる、K.の死後に城に承認されたというシオニズム的な構想の結末と同じ程度である。カフカはオルガに語りの主導権を与えることによって、いわばK.の願望を打ち砕くが、その際、作家が自らの分身である主人公を弄ぶことを辞さないかのようにさえ見えるのだ。

『城』において城を捉えることのみならず、また同時におそらくカフカは最初の枠組みにおいていた「メシア的な解放」の構想さえ放棄したのかもしれない。オルガに語り手が変わることで、K.、そしてブロートの望むような安住の

⁴⁴ FKAIV, S.101.

結末は放棄され、しかも枠物語も破綻し、絶筆として巨大な断片の塊が遺った。この未完の『城』はもともと、語り不安定さが前提としてあるとも言えるかもしれない。つまり、近づこうとしても到達できない城の存在の怪しさは、実は村人同様にカフカ自ら、過去から現在に連なる正統性も、また正統であることの痕跡を過去に認めさえしないからであるようにさえ思える。この論文の冒頭と重複するが、あの、城の由来を説明する文に線を引き、反古にする箇所を引用しよう。

「それでも依然として、その跡地からわかるように、~~伝承はそれがある~~広大な遠く離れた、城のような建物であったことを証明する」⁴⁵

この文中に「伝承Überlieferung」という単語が含まれるのに注目せねばなるまい。カフカが執筆中に、城が「城のような建物」として、遠い昔にあったような伝承の幻想として描こうとして、そこで躊躇し拒絶した理由がいまや明らかである。ここには、K.が廃墟の幻想に没入するロマンチックな場面の構想が放棄されるのみならず、むしろ作家自らが、そもそも伝承そのものを口にすることさえ禁じようとする決意表明なのである。すなわちK.の眼前に出現した村に残された「過去の城の痕跡」は物語るためのいわば「好物」と呼べる題材であるのに、カフカは決然とそれを斥けた。どのような過去も物語の主人公の正統性を与える根拠にならず、むしろK.の徒労と幻滅の繰り返しだけを書いたカフカの意図は、カフカ自らが伝承を信じられない、過去の正統性、あるいは経験の重みを実感できないことを表明することにあるのだろう。見えはするが、いつまで経っても到達できない城、また中心（城）と周縁（村）の境界があやふやになること、また歩き疲れたK.の徒労した眼差しにおいて遠さと近さが渾然一体となって迫る描写⁴⁶など、これらはすべて経験として蓄積すべき過去がないことに起因する。K.が積み重ねていく幻滅の経験が『城』という小説のリズムを成すのである。そしてこの小説の中で描かれる季節は永遠に冬であり、春の暖かな日の光が照らすのは思い出だけで、いつまでも春はこない。なぜならカフカには「メシアニズム」を、すなわち過去から由来する結末をどうしても書くことはできなかったからである。

⁴⁵ Vgl. NSFIIApp. S.393.

⁴⁶ JV, S.23-32.

【参考文献】

一次文献

Franz Kafka: *Das Schloss*, hrsg. von Roland Reuss und Peter Staengle, Stroemfeld/Roter Stern, Basel; Frankfurt am M., 2018.

Franz Kafka: *Nachgelassene Schriften und Fragmente* hrsg. von Malcolm Pasley, Frankfurt am Main, S. Fischer, 1992-1993.

二次文献

Hrsg. von Malte Kleinwort und Joseph Vogl: »Schloss«-Topographien Lektüren zu Kafkas Romanfragment, Transcript, 2013.

Matthias Schuster: *Franz Kafkas Handschrift zum Schloss*, Universitätsverlag Winter Heidelberg, 2012.

Martin Kölbl: *Die Erzählende in Franz Kafkas ›Das Schloss‹*, Stroemfeld, 2006.

Klaus Wagenbach: *Franz Kafka. Biographie seiner Jugend*, Klaus Wagenbach, 2006.

Franz Kafka: *Das Schloss*, hrsg. von Max Brod, New York Schocken Books, 1946.

Franz Kafka: *Zürauer Zettel*, hrsg. von Roland Reuß, Peter Staengle, Stroemfeld/Roter Stern, Basel; Frankfurt am M., 2011.

Max Brod : *Über Franz Kafka*, Frankfurt am Main, Fischer Bücherei, 1966.

明星聖子著『新しいカフカー「編集」が変えるテクストー』慶應義塾大学出版会 2002年

リッチー・ロバートソン著・明星聖子訳『カフカ』岩波書店 2008年

明星聖子・納富信留編著『テクストとは何かー編集文献学入門』慶應義塾大学出版会 2015年

クラウス・ヴァーゲンバッハ, マルコム・パスリー編著『カフカ=シンポジウム』吉夏社 2005年

マックス・ブロート著, 岡田幸一, 川原栄峰共訳『カフカ: その信仰と思想』パンセ書院 1954年

中澤英雄著『カフカ ブーバー シオニズム』オンブックス 2010年

池内紀著『カフカの生涯』新書館 2004年